

初期言語発達における終助詞"ね"の機能

著者	矢野 のり子
雑誌名	神戸山手大学紀要
号	18
ページ	89-98
発行年	2016-12-20
URL	http://id.nii.ac.jp/1084/00000631/

初期言語発達における終助詞“ね”の機能

Developmental functions of finality particle “Ne” in early childhood

矢 野 の り 子

キーワード：コミュニケーションの根源的機能、対話構造、発話の連鎖、
感情の共有、マザリーズ
function as the basis for communication, phatic communication,
turn taking, sympathy, motherese

要 旨

子どもの初期言語発達における終助詞“ね”の機能について、筆者の長男Y児と次男W児の縦断的で質的なデータと大学生への実験による量的調査から検討した。明らかとなったのは次の4点である。

(1) Y児の場合は1歳6ヵ月5日に、W児の場合は1歳8ヵ月6日にどの助詞よりも早く終助詞“ね”が出現している。Y児の場合は発話の連鎖を作る機能として、W児の場合は共感を表す機能を担って出現した。(2) “ね”の基本的な機能は会話の連鎖をすることにある。ことばはまず発話として出現する。音声によるコミュニケーションであるおしゃべり機能が基本と言える。そうした時、終助詞“ね”は文の終わりとしてより先に発話の終わりあるいは会話の連鎖のターンテキングの役割を担うものと言える。(3) 最初に現れる終助詞“ね”は、コードの共有ではなく、感情の共有を示していると思われる。他者を想定しているのであるが、自己と他者が分化しつつも、場面に溶け込んだ（癒合的な）文脈の中で生じている。(4) 終助詞“ね”は、大人が乳児に話しかける際のマザリーズの機能も担っている。大人が乳幼児に話しかけるときの終助詞“ね”を多発することが乳幼児にとって“ね”の獲得が容易であり早く獲得すること、そして誤用があらわれないことにつながっていると思われる。

終助詞は典型的に会話に現れる形式である。会話の連鎖がコミュニケーションの基本構造であることを考えるとき、終助詞“ね”は、日本語において対話構造のなかで共通にみられる根源的な機能をもつ。

1. はじめに

終助詞とは広辞苑によれば、「文や句の終わりに用いて、疑問・禁止・詠嘆・感動などの意を表す助詞」とある。終助詞の特性として次の3点が挙げられることについては、一定のコンセンサスが得られているといわれる（山森、1997）。①コンテキストを参照してはじめて指示対象が決定できる「いま、ここ」性を持つ。②現行発話への話し手の認知様相を表明する。③聞き手に対する話し手の何らかの態度を表明する。そして多くの研究が②を終助詞の主たる特性とする。つまり、現行発話と先行状況とが非整合的ではないとの話者の認識を表すことを基本的な機能とするというのである。共有知識の形成や話者の心内認知過程のモニターといったことである。終助詞“ね”が情報、知識の調整に関わり、知識の共有を確認し、同意を求める特性

をもつとする立場も同様である（大曾、1986：陳、1987：菱沼、1988）。

しかしそこには、実際の会話に現れる終助詞のデータを分析対象としてこなかったことに加えて、次のようなコミュニケーション・モデルにとらわれていたことが関係しているように思われる。つまり伝達される情報は、受け手の応答に関係なく、ア・プリオリに特定の意味や意図が仮定されており、しかも会話参与者間でその正確な伝達・再現が志向されているという意味（「コードの共有」）での「伝達モデル」である。しかし、このようなコミュニケーションはコミュニケーションの一樣態にすぎず、実際には先行発話に対して、後続発話による理解が示され、それを契機に、さらに後続発話へと連鎖が形成されるという事実がある。

ターンテキングや復唱はこのような状況下では強く求められる事象である。コミュニケーションの成立を、発話の連鎖の形成としてとらえると、終助詞の特性は①にこそ置かれるべきであろう。終助詞は典型的に会話に現れる形式である。このような問題提起のなかで、本論では終助詞“ね”について検討する。

言明の内容よりも聞き手に対する話し手の態度という対人関係をあらわすものとしての終助詞“ね”の機能として、井上（1993）は、i）共有知識の形成、ii）話し手の心内認知過程のモニター、iii）対話調整、iv）聞き手に対する態度の表明を挙げている。iii）の対話調整機能としての終助詞“ね”について、片桐（1995）は次のようにいっている。会話は複数の参加者によって行われる共同行為である。それゆえ、終助詞は、動的に変動する会話を有効に進行させるための調整機能をもつ。

山森（1997）は、終助詞“ね”が間投詞としても用いられることも視点にいれ、“ね”が会話のフレームへの注意を呼びかけ、会話の連鎖を作る連結機能を担うという。

本研究では、会話の連鎖をつくる終助詞“ね”が子どもの初期言語発達において他のどの助詞より早く出現することを報告する。そして、終助詞“ね”の機能を検討するとともに、おしゃべり機能である会話が子どものコミュニケーションに原初的なものであることをみていきたい。また、“ね”は、文末に現れるだけでなく、文中に現れる間投的な用法をもつことをみていく。

2. 方法

筆者の長男Y児と次男W児の日常生活の中での発話を録音したテープを起したものと、そのつど筆者が記録した発話を分析する。筆者が参与しながらの観察で状況を記録し補っている。

Y児は活動水準、エネルギー水準が大変高く、定額2ヵ月の終わり、寝返り3ヵ月の終わり、始歩10ヵ月と姿勢運動面の発達は早かった。言語発達において、一語ずつ音声模倣していくのではなくジャルゴン^註による発話が盛んであった。初語「マンマ」が10ヵ月21日に出ているが、2歳過ぎになり有意味語によるスピーチが優勢になるまでの間、ジャルゴンによるおしゃべりが盛んであった。明確な二語文出現は1歳11ヵ月であった。終助詞“ね”の出現は1歳6ヵ月で、ジャルゴンによる発話を分節化していくなかで出現した。

W児の場合、エネルギー水準は高かったが活動水準はあまり高くなく、おっとりとした気質

であった。定額3ヵ月、寝返り6ヵ月、始歩1歳2ヵ月と姿勢運動面の発達は平均であった。初語「マンマ」が10ヵ月7日に出てから、音声模倣が盛んで、有意味語の獲得が早く、ジャルゴンによるおしゃべりの時期は短かった。1歳3ヵ月以降、W児は語彙の爆発的増加と有意味語優勢な発話が出現し、二語文を獲得していった。1歳8ヵ月には多語文優勢な発話となり、そのなかで終助詞“ね”が出現した。

3. 1 「ね」は発話の境界を示し会話の連鎖を作る。

終助詞“ね”はY児においてもW児においても他のどの助詞よりも早く現れている。以下に事例を示す。その時期は、1歳2ヵ月3日であれば(1:2、3)と表し、筆者である母親の発話は<>に漢字とひらがなで表記し、Y児とW児の発話は「」にカタカナで表記する。

Y児の事例

Y〔記録1〕(1:6、5) 英語の本を見ながらひとり言のジャルゴン。「ナシュシュア グウウアー
ン ヒュウウヤン シュウウウネ・・・カウウ カウウウヤン・・・」

Y〔記録2〕(1:7、21) 母といっしょにゾウの絵本を見ている。「ジョウサン ジョウシャン・・・
ネ」

また、ジャルゴンによる母との会話のなかで、助動詞「だ」の関西弁である「や」とともに「ね」が頻発している。

Y〔記録3〕(1:8、22) ままごと道具でひとり遊びしながら、「ドウジョ チュウチュウヤ チャ
ンチュウヤ ドウジョ」・・・「コエコエナイナイタ・・・エンデヤ ククウヤ コエヤ コエ
ヤ コエネ」

Y〔記録4〕(1:8、24) 母と描画している。「シュウシュッパイ シュッパイア・・・コーヤッ
テ コーヤッテ シュッパイ パイ・・・コエハ シュウウアパイ コエハ シュウウアパ
イ・・・」「アイアイ アジュジジャー ハアー コエヤ ナンヤ コエコエ ジョウチャン
ネ(と長い2本線描く)<ぞうさんだねえ>ジョウチャン コエコエ アッ コエヨー ナ
ンヤ<何だろうね>アーア コエコエ ジョウシャンネ<これは何かな?>ナンヤ ナンヤ
マイア ナンヤ アッ アーア アーア(と塗りつぶす)コエコエ コエネ(と円錯画する)」
尚、“ね”の次に出現した助詞は命名のための係助詞“は”であった。

Y〔記録5〕(1:9、14) 絵本見ながらひとり言「ゾウサン コエハ」「ワンワン コエハ」

記録1から記録4にみられるように、Yのジャルゴンによる発話においては、それまでの抑揚や強弱といったプロソディを持つだけのジャルゴンに文節化がみられて来る。ここにおいて、まず“ね”“よ”“や”といった助詞、助動詞による文節化が現れる。ここでは、終助詞によって会話のフレームへの注意を呼びかけ、発話の連鎖を作っているといえる。終助詞は文の終わりを示すというより、発話の連鎖を作っているといえるだろう。また、話者から聞き手へのターンテキングのサインともいえる。文法上は、「まず文に分けられ・・・結合語と語に分解される。語は小さな音声単位である。」とされる。しかし、現実的にはまず発話があるのである。

Foster-Cohen (1999/2001) によれば、子どもは安定した意味を持つ「単語」(語彙)と、そうした意味を持たない喃語やジャルゴンを結びつけるような、発話の内部に起こる穴を埋めるための「穴埋め音節」を使う時期があるという。その例として、Lois Bloom の研究対象だった子どもが /ə/ をこの目的に使用していると報告している。この子どもは /ə/write、/ə/pen、/ə/bag といった言い方をしたという。Foster-Cohen 自身も息子が /ə/more、/ə/more と言った例を示している。日本語の場合、このような穴埋め音節として助詞が使用されることは考えられる。記録3や記録4に見られるように、とりわけ終助詞は穴埋め音節として会話のフレームへの注意を呼びかけ、会話の連鎖を作っているのだといえる。

子どもは乳児期から母親とターンテーキングをしつつ音声による相互作用を行っている。3、4カ月児になると、子どもは自発的に発声すると、いったん沈黙する。ひきつづいて母親から返事がないときには連続的に声をあげるが、その間の沈黙の長さは、ふつう母親が返事を返してくれる場合の時間間隔とよく符合しているという。母親が返事を返す場合、8割以上の母親が子どもに似せた音でおうむがえしに応じるという。つまりターンテーキングによる音声コミュニケーションを行っているのである(正高、1993)。

Bakhtin (1929/1979) は次のようにいう。「発話の境界に比べるならば、残りの境界(文、語の結合、連辞、語の境界)はどれも相対的で条件づきのものである。」そして、発話の完結性はことばの主体の交替であり、発話の完結性のもっとも重要な基準はその発話に対して返答が可能ということだという。Goffman (1963/1980) もまた、応答は、いま・ここでの発話を通してしかなしえないとし、会話の連鎖に重点をおくコミュニケーション・モデルを示唆している。

ことばはまず発話として出現する。音声によるコミュニケーションであるおしゃべり機能が基本と言えるだろう。おしゃべりは他者を前提としたものであり、そうした時、終助詞“ね”は文の終わりとしてより先に、発話のフレームや終わりの機能を担い、また会話の連鎖のターンテーキングの役割を担うものといえる。

終助詞“ね”は文の終わりとしてより、まず発話のフレームや終わりの機能をにない、また会話の連鎖のターンテーキングの役割を担うものと言える。そうしたとき、「ね」は終助詞としてだけでなく間投詞としても機能している。

発話のフレームを作り、ターンテーキングの役割を担う終助詞(間投詞)「ね」は、子どもがやがて記憶を回想し物語を伝えていくときの発話への準備、息継ぎの役割を担ってくる。

Y〔記録6〕(2:7、13) 祖父母といっしょに動物園に行く。帰宅して母親に「ドーチュエン(動物園) イッタノ」<動物園いったの・・・何がいたのかな?>「クマサン。 クマサン オフロハイッタタネ シャボンシャボンシッタネ イイキモチシッタネ」

Y〔記録7〕(2:7、14) 動物園へ行った次の日。テレビのニュースで飛行機を見て、「クン(Y児の自称詞)ネ クンネ ヒコウキノッタネ イイキモチダッタネー」

Y〔記録8〕(2:7、26) 朝食のとき、「タツプリノネー タツプリノネー タツプリノ ゴハン タベルワ」

上記の例は、「たっぷり」という新しい語彙を獲得したY児が、新しい語の結びつきを探索し

ながら話している。ここにおける「ね」も物語を伝えていくときの発話への準備、息継ぎの役割を担っているといえる。

助詞の出現の順序について、大久保（1967）は長女の観察記録から報告している。それによると、終助詞がまず出現し続いて格助詞が出現している。YにおいてもWにおいても、まず終助詞“ね”が出現し、続いて格助詞が出現している。その他にも終助詞“ね”が、子どもの言語発達において最初に出現するという報告は多い（大橋、1950：伊藤、1990：藤原、1977：綿巻、1999）。一方、横山（1997）は、一人の男児の縦断的観察から、まず格助詞が出現し、その後に終助詞が出現しているといっており、そこには個人差が見られる。また、横山は格助詞では誤用が多いのに対し、終助詞では誤用がまったく現れていないことも指摘している。つまり、終助詞の獲得はきわめて容易であると思われる。このことは、終助詞が初期言語発達において、文における統語機能より会話のフレームを作り、会話にリズムをもたせる機能を担っていることによるのではないと思われる。

3. 2 マザリーズとしての終助詞「ね」——実験的研究から

大学生24名（男15名、女9名）に対して、新K式発達検査の「絵の叙述」3枚（①室内で女の子が母親のそばで人形遊びをしている場面、②バス停で数人のひとが別々の活動をしている場面、③公園の池で父親と男の子がボートに乗っている場面）についてレポート報告してもらった。レポート報告する相手を想定し、1）大学生、2）幼児、3）お年寄りとした。レポート報告における助詞“ね”の出現頻度をみると、相手が大学生の場合、平均3.05（男2.53、女3.56）、相手が幼児の場合23.2（男15.6、女30.8）、そして相手がお年寄りの場合7.24（男6.8、女7.68）であった。相手が幼児の場合には助詞「ね」の出現率が急増する。とりわけ女子学生においては、レポート報告の相手が幼児だった場合に助詞「ね」の頻度が急増している。

Ferguson（1966）は、6つの異なる言語圏での母親の乳児への語りかけの比較検討を行い、それぞれがお互いに何の交渉もないにもかかわらず、いずれにおいても母親の語りかけには共通した特徴があることを見出して、マザリーズ（motherese）と命名した。大人が乳児に話しかける際には、日常的に成人に向けて話す時とは違って、一度の発話に含まれる語彙数が少なくなり、文構造は単純化し、反復が多くなされる。音律的特徴において、音の全体としての高さが上昇し、抑揚が誇張され、テンポはゆったりとしてかつ発話の間の沈黙の時間幅が長くなることが知られている。

藤原（1977）は、自身の子どもと孫たち7人の観察記録から、子どもが1歳3ヵ月頃より“ね”を使った呼びかけが頻発したという。助詞のなかで一番早く出現したのも“ね”であった。“ね”は大人が使う用法の範囲をはるかに超えて、どこでも自由に使われたし、単独の発音で“ね（～）”のイントネーションで呼びかけることも頻発した。また、「バカ（かば）ね（この子は動物のことをバカと音を転倒させて用いていた）」といった組み合わせで同意を求めたという。藤原もまた、大人が“ね”を多用していることを指摘している。

終助詞“ね”の多用はマザリーズの一形態なのではないかと思われる。このことは、先述し

たターンテキングを伴う音声でのやりとりが乳児初期から出現していることや次節で検討する“ね”の主観性や共感性とも関係していると思われる。乳幼児に話しかける時、大人が“ね”を多用することが、子どもの側でもまた“ね”を多用し、かつ早くに“ね”の使用を学習していくことにつながるであろう。また、終助詞“ね”が初期言語発達において、文における統語機能より会話のフレームを作り、会話にリズムをもたせる機能を担っていることにもつながっていく。終助詞“ね”の誤用はほとんどみられないと先述したが、マザリーズとしての話しかけが乳幼児にとっての終助詞、とりわけ“ね”の獲得を容易にしている大きな要因であると思われる。

表1 絵の叙述における“ね”の頻度

	大学生を想定	幼児を想定	お年寄りを想定
男	2.53	15.6	6.8
女	3.56	30.8	7.68
総計	3.05	23.2	7.24

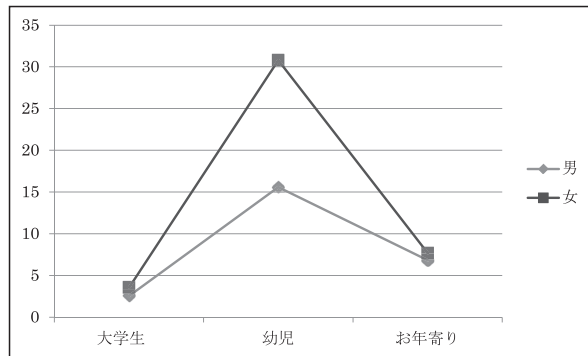


図1 絵の叙述における“ね”の頻度

3. 3 終助詞「ね」の主観性

聴者に対する話者の何らかの態度を示すものとしての終助詞“ね”について検討する。終助詞の主観性ともいえるこの機能においては、発話の対聞き手的（現場的）行為としての側面を直接に担う。主観的意味＝発話の対聞き手的行為としての側面を担うのである。

W児の事例

W〔観察9〕(1:8、6) 母と列車を見に行って、なかなか来ない時「ポッポ ナイネ」

W〔観察10〕(1:9、22) 母と買い物帰り、建物の日陰に入って急に寒くなると「シャムイネー」

W〔観察11〕(1:10、10) 風呂上り、母といっしょのはんてんを着て「オカアシャント イッショネー」

尚、W児においても“ね”の次に出現した助詞は係助詞の“は”であった。

W〔観察12〕(1:8、7) 新幹線の写真を持ってきて「コエハ？」と聞く。

観察9と観察10で出現している終助詞“ね”は、相手（聞き手）への共感を示していると言えるだろう。単に「ポッポ ナイ」「シャムイ」と言うのとはずいぶん違っている。あえて“ね”というところには、自他の分化を前提としていることが感じられるが、自他の分化を前提としつつも、相手に共感を求め、しかも相手との共感のズレを前提としていないように思われる。この時期、W児は他者との共感を求める言動を次々と示している。1歳4カ月の初め、他者との共感的な関係を基本とした形容詞バーバ（きたない）、タタ（いたい）を獲得している。そして、終助詞“ね”が出現する時を同じくして、1歳8カ月5日には、観察10のように他者の気

持ちを推測しての共感的な質問をしている。

W〔観察13〕(1:8、5) 夕食の時、「アイシー？(おいしい?)」と聞く。

W〔観察14〕(1:9、29) 兄Y児がりんごを食べている時、指を噛む。W児は兄の指に手をそえて「ナイナイ タタ(いたいいたい とんでいけ)」と言う。兄が苦笑いすると「マダ イタイ？」と聞く。

このような他者の経験や気持ちを推測する質問は、一方で経験を共有しようとする言動とつながっているといえる。

Wallon (1949) はこの時期の子どもを「癒合的自我」の時期と呼ぶ。自分が他者から分化していることを前提としながら、自分が他者に参与しているのである。場面に溶け込んだ自我においては、自分と切りはなされた明確な他者を前提としているとはいいがたい。子どもの初期言語発達における終助詞“ね”は現行発話への話者の認知様相を表明するという機能はほとんど担ってないと言えるであろう。現行発話と先行状況とが非整合的ではないとの話者の認識を表すという基本的な機能は担ってないのである。現行発話が先行発話と非整合的だという思いがそもそもないともいえる。話者と聴者の自他関係が前提なのであるが、そこにずれを想定していない。共有知識の形成や話者の心内認知過程のモニターといったことはここにはないといってよい。コードの共有より感情の共有が問題なのである。

Wallon はまた、子どもが自他未分化な初期の癒合的場面から脱却して個人性の獲得へと向かう中間段階を特徴づけるものとして、一人二役の自己会話のひとり言をあげている。このようなひとり言のなかにも終助詞の“ね”、“よ”が出現している。

W〔観察15〕(2:3、14) ウルトラマン人形と電車をじゅうたんの上に置き、「Wクンモ ネンネ ショ」と言い、「チョット マッテテネ」と人形に話しかけ、仰向けで絵本をかざして人形に話しかける。

W〔観察16〕(2:3、26) 一人でブロックで遊びながら、「イーコト カンガエタ」人形を触りながら、「ハイ アイシュ タベウカ」・・・「タベウ？オイシイデ」「オイチニ オイチニ」と人形を歩かせる。・・・「ココナー ダイジョウブネッ ネッ」「Wクン チュクッタゲヨウネ ネッ ネ」歌を唄う。

人形を使つての一人二役のふり遊びのなかで、ターンテーキングが成立している。一人二役のふり遊びにおける自己会話としてのひとり言は他者を想定した応答的なことばであるといえるだろう。観察1、観察3にみられる長男Y児のジャルゴンによるひとり言もまた、他者を想定した会話といってよいであろう。2歳前半にはY児においても、ふり遊びにおける自己会話のひとり言が出現している。ここにおいても終助詞“ね”“よ”が頻発している。

Y〔観察17〕(2:4、24) 一人で積み木を並べ、新幹線のおもちゃを手にしながらか、「コエネ コエネ テッキョウ テッキョウダ ハシレヨシテ ママ(と隣室のMoに呼びかけるが、そのまま発話を続ける) キシャ シュッポ シュッポ ハヤイヨ カンカンカン トオリマ シュヨ コエネ コエネ タンババシ(駅の名) ツイタヨ オバアチャントコ イクヨ」子どもの早期言語発達におけるひとり言は、自己と他者が分化しつつも、場面に溶け込んだ

(癒合的な)文脈の中で生じている。いうまでもなく近くに親しい他者(主に母親)がいる状況がこのようなひとり言を誘発しているであろう。家族と家庭という人と場の中で、ものごとの内容と場を深く共有しており、自分の思いと相手の思いへのズレを前提としない、周りの世界への信頼と甘えが感じられる。言語発達において、最初に現れる終助詞“ね”は、コードの共有ではなく、感情の共有を示していると思われる。

4. まとめ

子どもの初期言語発達における終助詞“ね”の機能について、筆者の長男Yと次男Wの縦断的で質的なデータと大学生への実験から明らかとなったのは次の4点である。

1) Y児の場合は1歳6ヵ月5日に、W児の場合は1歳8ヵ月6日に終助詞“ね”がどの助詞よりも早く出現している。このことは、多くの縦断的観察記録から検証された結果と符合する。Y児の場合は発話の連鎖を作る機能として、W児の場合は共感を表す機能を担って出現している。

2) “ね”の基本的な機能は会話の連鎖を作ることにある。ことばはまず発話として出現する。音声によるコミュニケーションであるおしゃべり機能が基本と言えるだろう。おしゃべりは他者を前提としたものであり、そうした時、終助詞“ね”は文の終わりとしてより先に発話の終わりあるいは会話の連鎖のターンテキングの役割を担うものと言える。

ふたたびBakhtinを引用する。「文は語と同じく、誰のものでもない。それは発話として機能することによって初めて、言語コミュニケーションの具体的な状況のなかで語る個人の立場を表すものとなる。どんな発話も言語コミュニケーションの連鎖の一環となる。」(Bakhtin, 1979)。

3) 最初に現れる終助詞“ね”は、コードの共有ではなく、感情の共有を示していると思われる。自他の分化を前提としつつも、相手に共感を求め、しかも相手との共感のズレを前提としないように思われる。他者を想定しているのであるが、自己と他者が分化しつつも、場面に溶け込んだ(癒合的な)文脈の中で生じている。

4) 終助詞“ね”は、大人が乳児に話しかける際のマザリーズの機能も担っている。大学生への実験からは、相手が幼児であると想定した場合の話しかけにおいては、終助詞“ね”が急増することが示された。とりわけ女子大生においては顕著である。大人が乳幼児に話しかけるとき終助詞“ね”を多発することが乳幼児にとって“ね”の獲得が容易であり、早く獲得すること、そして誤用があらわれないことにつながっていると思われる。

終助詞は典型的に会話に現れる形式である。子どもの早期発話において出現する“ね”は自他の分化を前提としていることが感じられるが、自他の分化を前提としつつも、相手に共感を求め、しかも相手との共感のズレを前提としないように思われる。自己と他者が分化しつつも、場面に溶け込んだ(癒合的な)文脈の中で生じているのである。

終助詞“ね”の基本的な機能は会話の連鎖を作ることにあるとみなせる。会話の連鎖がコミュニケーションの基本構造であることを考えると、終助詞“ね”は、日本語において対話

構造のなかで共通にみられる根源的な機能をもつ。子どもの初期言語発達において“ね”は根源的な声のやりとりの機能を担っていると思われる。

註

ジャルゴン (jargon) という語は本来「わけのわからないことば」という意味で用いられ、西欧諸国においては日常語に属するという。失語学においては、失語患者が流暢に話すわけのわからない発語をジャルゴンと称する(波多野、1991)。村井(1995)は、喃語期を過ぎた言語発達過程において、子どもが養育者に話しかけるような発声、あるいはひとり言のように聞こえる発声に注目し、これを子どものジャルゴンと呼んだ(同一音や類似音が繰り返される反復喃語はジャルゴンとはみなさない)。このジャルゴンは一語発話がなされる頃にもみられ、二語発話時まで続くと考えられる。

文献

- Bakhtin, M. (1979): ことば・対話・テキスト(新谷敬三郎・伊東一郎・佐々木寛訳(1929): ミハイル・バフチン著作集8。東京、東京新時代社)
- 陳常好(1987): 終助詞——話し手と聞き手のギャップをうめるための分節辞。日本語学、6-10。
- Ferguson, C. A. (1966): Assumptions about nasals; A sample study in phonological universals. In J. Greenberg (Ed.), *Universals of Language*. 2nd ed. Cambridge: MIT Press. 53-60。
- 藤原与一(1977): 幼児の言語表現の能力の発達。東京、文化評論出版。
- Goffman, E. (1963): *Behavior in public places: Notes on the social organization of Gathers*. Macmillan, New York.
- (丸木恵佑・本名信行訳(1980): 集まりの構造。東京、誠信書房)。
- 波多野和夫・村井潤一(1995): 発達心理学辞典「ジャルゴン」の項、(岡本夏木、清水御代明、村井潤一監修)、京都、ミネルヴァ書房、306。
- 蓮沼昭子(1988): 続・日本語ワンポイントレッスン。言語、17-6。
- 井上優(1993): 発話における「タイミング考慮」と「矛盾考慮」。国立国語研究所報告107、国立国語研究所、333-360。
- 伊藤克敏(1990): 子どものことば——習得と創造。東京、勁草書房。
- 片桐恭弘(1995): 終助詞による対話調整。月刊言語、24(11)、38-45。
- Masataka, N. (1992): Pitch characteristics of Japanese maternal speech to infants. *Journal of Child Language*, 19, 213-223。
- 正高信男(1993): 0歳児がことばを獲得するとき——行動学からのアプローチ。中公新書、東京、中央公論社。
- 大橋博司(1950): 幼児の言語発達(美知子の場合)。私家版、1-8。
- 大久保愛(1967): 幼児言語の発達。東京、東京堂出版。
- 大曾美恵子(1986): 誤用分析1「今日はよいお天気ですね」——「はいそうです」。日本語学。5-9。
- Susan, H. Foster-Cohen (1999): *An introduction to child language development*. Wesley Longman Limited, London.
- (今井邦彦訳(2001): 子どもは言語をどう獲得するのか。東京、岩波書店)。
- 山森良枝(1997): 終助詞の局所的情報処理機能。(谷泰編著「コミュニケーションの自然誌」5章。)東京、新曜社。
- 矢野のり子(1994): ある男児の自己意識の形成——個別性と共同性をテーマとして——。京都国際社会福祉センター紀要「発達・療育研究」10、17-31。
- 矢野のり子(2003): jargon タイプの言語発達。第14回日本発達心理学会大会発表論文集。
- 矢野のり子(2004): jargon タイプの言語発達——その2——。第15回日本発達心理学会大会発表論文集。
- 矢野のり子(2004): 初期言語発達における終助詞「ね」の機能。第14回社会言語科学学会大会論文集。

矢野のり子 (2006) : ジャルゴンタイプの言語発達。児童青年精神医学とその近接領域、47 (5)、440-451。

矢野のり子 (2008) : 早期ひとり言の発達の機能——縦断的観察記録からの再考——。奈良女子大学人間文化研究科年報24、139-148。

横山正幸 (1997) : 文法の獲得〈2〉——助詞を中心に——。(小林晴美・佐々木正人編 「子どもたちの言語発達」。) 東京、大修館書店。

Wallon, H. (1949) *Les origines du caractère chez l'enfant-Les preludes du sentiment de personnalite*. Press Universitaire de France. (久保田正人訳「児童における性格の起源」明治図書)

綿巻徹 (1999) : ダウン症児の言語発達における共通性と個人差。東京、風間書房。